Nagoya City University

定年退職特別寄稿文

黒板を背に科学的真理の追究を試みた40年間を顧みて

後藤　寛

本年3月をもって定年退職することになりました。研究論文集としての大学の「紀要」にこのような単なる随筆文を寄稿することは当初まったく考えていませんでしたが、周りの方からこの機会に何か書いてみてはどうかと勧められもしましたし紀要編集委員長という立場からもこのような内容のものを今回特別に巻末に付けたす形としたことを断っておきます。

私は二十代の半ばに名古屋市内の県立高等学校の教員を振り出しに、その後大学・短大の非常勤の教員として、さらにその後に専任の大学教員として通算19年間教壇に立ったあと、昭和63年に本学部の前身である看護短大部に赴任し以後さらに20年間教員として教壇に立ってきました。通算ほぼ40年間（正確には39年間ですが）にわたり教育・研究に携わってきたことになります。私の場合は本学部における他の教員の方のように医療機関で仕事をしたことはもちろんまったくありません。いわゆる教育界のみを渡り歩いてきた人間ということになりますが、この世界に関する限りはかなりの場数を踏み経験を積んできたことは事実です。専任の教員として5校の教壇に立ったことになりますし、また非常勤の教員として15校ほど経験し全部で20校ほどの教壇に立ってきましたから教壇での執着心が特別に強くなりました。教え子の数もかなり膨大ですが私としては二十代の頃に特に県下有数の進学校である県立高等学校で専任として教えていたときの教え子が例外なくきわめて優秀で粒ぞろいであったことが思い出深いです。もうこの教え子たちも年齢的に57～8歳になっていますが、意欲・集中度・関心の度合いが強く今日の日本の一般的な大学生の比ではありませんでした。

学生時代から黒板の前に立つそれぞれの教師の話し振りや物腰に大変興味を抱き気に入った教師をイメージ化しながら自宅で小型の黒板とチョークを用いて物真似をよくしていて、もうその頃から私は学校の教師になるつもりでした。このほぼ40年間で黒板を背にすれば率直に言って私は自由自在でした。教室という空間が私にとっては自分というものが真に出せ、試せる場でした。しかし一旦教壇を降りるとあまり本気で自分というものを前面に出すことはせず、また真の自分を出すこともできない人間でした。概してその道ひとすじの学校教師というものはそういう側面はあろうかと思うのですが私の場合は特別にそれが強かったと思っています。教室という特別な空間の中が私には最高に適するものであったということです。教師として追究する道と専門性に関する限りは完璧主義で臨み、本物志向できたつもりです。誰にも負けない信念と執念と強い情熱をもって取り組んできたと自負しています。プロ意識が強く根性をもって一直線できました。夏目漱石の『坊ちゃん』の中に描かれる教師像とも少し重なる部分もあると自分では思っています。

教師と言えば私の親族には教員が多く、妻もかつては高等学校の教員でしたが目下いちばん身近では二女が小学校の教員をしていて教育関係の話を日常的に取り交し近年の日本の教育界の移り変わりを改めて感じている昨今ですが、大学も大きく変化してきたと思っています。概して言えばアメリカの大学のコピーをしようという感じですが、やはり日本の風土の中では基本的になじまないものに思えます。私もアメリカの大学に正規の学生として留学経験をもっているのですが、日本の大学とアメリカの大学では授業形態も、教師・学生の意識も根本的に異なるわけです。日本の大学では「教え方」より「学び方」のほうにもっと問題があります。また最近、本学でも優秀な成績の学生を表彰しようという考え方が出てきたようですが、これもアメリカでは普通にあることで優秀な（英語ではCum laudeというラテン語からの言い方が常識ですが）学生に表彰状を出しています。もし日本の大学でアメリカ式にこれをするなら反対に学業が不振な学生に対する取り扱いも考えてよいと思います。アメリカでは優れた成績を修めた学生を表彰する一方で、反対に成績の悪い学生には厳しいわけです。成績が思わしくなければその学生を追い出すことを警告する文書（英語でProbation letterと言っています）を大学は発行します。本学でも一方を行えば他方も行ってみてはどうでしょう。成績の優・良・可のうち可の多い学生や再試でかろうじて可を取る学生は警告されてよいです。「再試」という概念はアメリカにはありません。英語でこれをMake-up testと言えば理解はされますが、基本的にこの概念はないわけです。ただしアメリカの大学に

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

Conditional pass（条件付き合格）というのがないわけではありません。しかしこれも日本でのいわゆる再試とは違うのです。いずれにせよ優秀な学生を表彰する（これを英語ではCarrot（ニンジン）を与えると普通に言いますが）と同時に成績不振の学生を警告していく（英語ではStick（棒）を与えると言います）ことが日本の大学でも常識的になるとよいでしょう。the carrot or the stick（ニンジンか棒か）の考え方によりもっと緊張感を与えていかないといけません。実は私自身アメリカ留学中にこれらの両方をもらいました。初年度の前期（First semester）にアメリカ人学生の読書量、勉強ぶりについていけず棒のProbation letterをもらいました。その後、根性を出し奮起して2度の表彰を受けCum laudeと評されもしました。幸いにも棒に代わってニンジンをもらったわけです。

私は英語学（English linguistics）を専門としてきました。分野としての大分類は言語学（Linguistics）となりますがこれは古代ギリシャ時代から研究対象となっている分野です。私はそのうちの個別言語としての英語、それも音声言語としての英語、さらにそれも米語に照準してきました。私はイギリス英語に関してはほとんど知りません。個人的好みからアメリカ英語に照準しこれを専門に研究してきました。ある意味でイギリス英語とアメリカ英語はまるで違うとさえ言えるわけで、音声言語としての両者は聴いた瞬間に区別できます。文字言語としても1頁程度書かれたものを見ればそれがイギリス人により書かれたものか、アメリカ人によるものかはだいたい判定できます。私たちの分野では基本的に英語学・英米文学の2大分類となりこれは日本語のほうの国語学・国文学と平行するものですが、英語学・英米文学それぞれその研究上の歴史は古く特にアメリカを中心に今日の英語学の研究成果には目を見張るものがあります。英語という言語の謎・原理はもうかなり分かってきています。学際的な優れた研究業績により普遍原理がかなり明らかになってきているわけです。どのように無限の文が生成され、どのように意味が決定され、どのようにそれが理解され、さらにそれによりどういう効果・影響を及ぼすかの抽象的で知的な理論は大変興味深く魅了されます。私は教員になる前の学生時代に英語という言語の美しさに魅せられ志をもって教室で黒板を前にして座っていました。この言語をとことん究めてみたいと夢中になっていました。そして気づいたら自分が今度は教壇で黒板を背に立ち教えていました。黒板を軸に180度の回転をしたわけです。学生時代から特別に好きで追い求めていた英語という民族言語（自然言語）の原理を今度は教師として黒板を背に人に教える立場となり、さらにみずから長年これを研究できたことはこの上ない幸せでした。最近になってますますこの英語言語の構築美、その数学にも劣らない厳密性と論理性が実感できるようになりました。数学における解法ではプラス記号（＋）とマイナス記号（－）をとり誤れば全体が真ではなく必ず偽となりますが、曖昧性を残さないこの厳密性が英語という言語にも内在していることがよく見えてきた感じがします。2＋2＝4でありこのことを英語でput two and two together（and make four）と慣用的に言いますが、これは「正しく推論・判断する」の意味です。2＋2＝4ではなく2＋2＝5である興味深い世界を英国の小説家George Orwellが描きましたがこれはOrwellism（オーウェリズム）であり別の思想です。George Orwellの描く世界は二重思考（Doublethink）であり全体主義（Totalitarianism）的な言語統制ですが、これはこれで言語学的に注目に値する思想です。語（Word）と意味（Meaning）が数学の概念のように1：1で対応（一語一義）するのであればこの世界の諸相もより明確になるのですが、コトバの意味概念は一枚縄ではないわけです。アナグラム（Anagram）といい文字の組み替え（文字転綴）で語に両義性（Double entendre）をもたせる表現手法がありますがこれは古代ギリシャ時代以来、韻文（詩文）や暗号文などに用いられる高尚な言語芸術でもあります。数年前、アメリカの新進作家Dan Brownは小説*The Da Vinci Code*（2003）の中でこのアナグラムを駆使して象徴性に富む見事な作品を著しました。1つだけその例を引き合いに出しておきます。日本語訳は越前敏弥（訳）『ダ・ヴィンチ・コード』（2004）からのものを付けておきます。

13－3－2－21－1－1－8－5

O, Draconian devil!（おお、ドラコンのごとき悪魔め！）

Oh, lame saint!（おお、役に立たぬ聖人め！）

（Dan Brown（2003），*The Da Vinci Code*, pp. 104-105）

最初の数字は配列を組み替えることを暗示する数列で有名なフィボナッチ数列1－1－2－3－5－8－13－21…のように数の小さい順に配列を組み替えると隣り合う2項の和が次の項の値と等しい無限数列となります。同時に2項の比が黄金比1：1.618に限りなく近づく数列となります。Draconian（ドラコンの）は古代ギリシャの横暴な政治家Dracoから来ていますが要するに一見、この小説の主人公によるローマカトリック教会への批判にも思えるのですが、これは暗号文としてのアナグラム（文字の組み替え）の例であり2行の文字をすべて組み替えると見事にLeonardo da Vinci! The Mona Lisa！となるわけです。そしてこの小説ではレオナルド・ダ・ヴィンチの絵画「モナリザ」に教会の秘密が隠されているという展開となります（詳しくは原著参照）。この作品は私の専門研究分野の延長線上にある象徴意味論

NII-Electronic Library Service

Nagoya City University

(Symbolic semantics) や記号論 (Semiotics) の観点からもきわめて興味深いものと考えています。案外、言語の構成法でもどこかでこの神聖な黄金比2：$(1+\sqrt{5})$ ≒1：1.618が原理的に支配しているのかもしれません。目下のところ意味的限定度を1/2を底（てい）とするxの指数関数 $y=(1/2)^x+\phi$ （ϕ≒1.618）（x≧0）と仮説的に考えその妥当性を追究しています。

論点をもどしますが、前述の黒板を軸に回転する教師の人生については、かつて哲学者・西田幾多郎氏がみずからの人生がそういうものであった趣旨のことをどこかに書かれていたのを記憶していますが、私自身まさにこの西田幾多郎氏の思いを実感している今日です。顧みると私のこれまでの人生も小学生以来、黒板を前にして座り、学校を出て教師として今度は黒板を背に立ち、まさに黒板の前で1/2回転したわけです。そして私の場合、語学教師としてほぼ40年間に渡り黒板を背に追究してきたことが何であったかと改めて顧みるとやはりそれはモノ・コトの本質としての真理であり、その美しさ・美的調和感を求めていたと思います。何が真で何が偽か、実像と虚像を科学的に執拗に追っていたと思います。概念的差異は（＋）×（＋）の（＋）ではなく、（－）×（－）の（＋）という2項対立 (Binal opposition) にあるという考え方に立ち2値的な (Two - valued) 世の中の見方に関して追究してきました。これは帰納的推論により公理系を発見しようとする20世紀初頭からの構造主義言語学 (Structural linguistics) の追究するところでもあります。A/非A(A/Not-A) の対立的見方はデカルト的な (Cartesian) 座標平面で横軸にEither - orとしてとれば縦軸にBoth - andがとれることになると考えますが、西欧言語の論理・論法を原理的に支配している構造をさらに突き詰めていくとどうやら旧約聖書の創世記 (Genesis) 冒頭で描かれる天地創造の　景をなす思想、すなわち混沌（カオス）的概念 (Concept) の次元から万物の創造主で人間より上位の存在である　神」によるモノ・コトの分節化（2分法：Dichotomy）にまでさかのぼるようにも思えます。この森羅万象、あらゆるモノ・コトに姿・形を与える、すなわち有形化・有界化するという発想に立てば西欧語としての英語　語のいわゆる冠詞 (Article) の定性 (Definite)・不定性 (Indefinite)、名詞 (Nominative) の可算性 (Countable)・不可算性 (Uncountable)、さらに空間詞 (Spatial particle) の現れ方に関わる問題なども説明できることになります。さらに深層構造 (DS構造) から無限に生成される表層構造 (SS構造) としての文 (S) のいわゆる主語 (Subject) には力のあるもの、大なるもの、活動するもの、生命のあるもの（とりわけ人間）が選択されこれが西欧言語の構築法上での美的価値をもっていることも分かってきます。古代ギリシャ時代には真 (Truth)・善 (Goodness)・美 (Beauty) への憧れは理想化された価値と結びつきこれらは神聖なもの、すなわち神 (the Almighty) に属するものとされたわけです。英語のSubjectは「臣下」の意味をもちますが、これもそもそもは「神の臣下としての人間やモノ」の意味です。歴史的に西欧的知のシステム (Intellectual system) は神による啓示的な真理から、古代ギリシャ時代の数学（幾何学）に端を発する理性的な真理へ、そしてこれがそのまま西欧的な美意識としてその後、合理的な原理への還元という形で近世に受け継がれ、さらに18世紀末から19世紀にかけての近代ロマン主義 (Romanticism) の美学の登場までつづくことになりました。現代の真・善・美の概念はこの土台の上にその価値をもっています。

私はこのほぼ40年間、専門の英語学、それも偉大な言語心理学者C. K. Ogdenの意味哲学 (Semantics) であるBASIC ENGLISHの明確な概念規定に関する理論を媒介にモノ・コトの真偽 (Truth or Falsehood) の問題に関わる西欧的な美的価値、より具体的には個々の英文を原理的に支配している構成美・美的調和感（これは芸術的彫刻物でも彫るようなある種の美学 (Aesthetics) と考えています）を黒板を背に人に説き、検証する連続のなかで自分を磨いてきたつもりでいます。黒板を前にして学び、その後これを背に教壇に立ち、黒板を軸にした1/2回転がささやかではありますが私という人間を大枠でつくってきたことになります。思うにこの黒板を軸にした1/2回転には通算年月としてほぼ60年間を要していることになります。

以上、自分のことばかりを書いた気もしますが、何かとお世話になった本学部の教育職・事務職の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。最後に上でアナグラムについて言及しましたので本学部である看護学部に因んでもう1つアナグラムの例を出ししめくくりとします。

Flit on, cheering angel!（羽ばたけ、快活チャキチャキの天使よ！）

これは何のアナグラム（文字の組み替え）でしょうか？そう、完璧にFlorence Nightingale（フローレンス・ナイチンゲール）となります。

NII-Electronic Library Service